

請に基いた計画が組合→村→市(町)→県→農林省と上程されて参りまして、それが国会で予算化の時は、大臣からの予算執行が指示され、完工すれば、その管理権は地元の共同体に還付される仕組みになっています。したがって着工に先立って、地元との紛争は決して起りえないし、これこそ正に日本的な民主主義の現実成果の姿なのです。まあ、建設省や運輸省系の大型プロジェクトは、いってみれば、“国が計画し、国が造り、国が管理するのだから、地元住民は邪魔にならないように、おとなしくそこを退け”と云う発想なのです。だから徹底的に反発するのでしょう』と。私は謹んで傾聴したあと、叩頭して辞去した次第です。

ヤロオの谷を訪れて

榎山政子

スコットランドの南、ボーダーカントリーと呼ばれる地方に美しいヤロオYarrowの谷がある。このあたりのハイランドの斜面には時折、羊の群れがみられるし、黒い岩石を積み重ねて造った牧場の柵もみられる。ピンクがかかった紫色のヒースのカーペットも一層、趣をそえる。ヤロオの谷をさくさくぼって行くと、ナチュラル・ミラーの別名を持った静かなセント・メリーロック(湖)が美しい姿をみせる。まるで夢のようなところ。私はこんなヤロオにひきつけられて、ついに二回も訪れてしまった。

ヤロオにひきつけられるそのわけは、私の好きな田園詩人ウィリアム・ワーズワスが歌ったところだからである。ワーズワスはヤロオの詩を三たび書いた。訪れぬヤロオYarrow Unvisited(1803年)、ヤロオを訪ねてYarrow Visited(1814年)、再びヤロオを訪ねてYarrow Revisited(1831年)と。その詩を少し拾ってみよう。

“あゝ、ヤロオの牧場は緑だ。

ヤロオの流れは心地よい！

.....

吾々はスコットランドに行くのだ。

蓋し近いとはいえ、

ヤロオの谷へは引き返すまい。”

だがワーズワスは遂にヤロオを訪ねた。

“それがヤロオか？

わが空想がかくも忠実に育くんで

胸に描いた幻想の流れか、

実物をみたために破られた幻影か？”

.....

とワーズワスは悲しみにみちた長い詩をつづるが最後には、

“然し何処にいても、ヤロオの面影は私と共に住み、私の喜びを高め、

悲しめるわが心を慰めるだろう”

と結ぶ。

ワーズワスは約二十年後、もう一度ヤロオを訪れた。イタリーに旅立つ詩人スコットにありためであった。この時の詩には何か安心感、落付きといったものが私には感じられた。

ところで、私の最初のヤロオの旅は1966年の夏、一年間ニューヨークで研究してきた帰りである。二回目は76年の8月中旬、モスコウの国際地理学会のあとの旅で、それは完全な休息旅行でもあった。最初のような物凄い感激はなかったけれど、すべてを忘れてセント・メリーを觀賞した。静かにワーズワスの詩を口づさんだりもした。こんな私に、“ワーズワスの旅なんてなんとも優雅ですてきですね。でも舞踏会の手帖——往年のフランス名画——みたいじゃないですか”と、暑い東京で私のアルバイトをされていて下さる津田塾大のH嬢から、ホテルに手紙がきていた。舞踏会の手帖でもかまわない。私はこよなくワーズワスを、そしてヤロオを愛するのだからといいかせた。

ふと、学問の世界だって似たようなものじゃないかと私は思った。こんな研究をしようか、それともこうしようかとアイデアを浮べているときはとても楽しい。でも一寸ばかりコワイのも事実。いざ着手して成果がでてくると、こんな筈ではなかったのにと落たんしたり、時には喜んだり。

もう一人、私の好きな詩人にジョン・キーツがいる。“ギリシャのつばによせて”という詩の中に、

“きこえるメロディーは美しい、

しかしきこえないメロディーはより美しい”

といった言葉がある。お祭りの笛の音が遠くからきこえてくる（実際はきこえないが）。若者が手をのばして前を行く恋人にふれようとするがおいつかない。こんな光景を刻んだツボである。

およそ詩人とは、詩情とは程遠い私である。だけど最高に素晴らしいものには手をふれないでおきたい… といった気持ちはたえずちらつく。時には全力をかたむけて、それに体当たりしてみたくもなる。

ヤロオよりもどりエジンバラからロンドンに向かう途中、私は幸いにも機上からもう一度ヤロオをみる事が出来た。しかも全景である。セント・メリーはなかほどが少しくひれている。ワーズワスの時代はもっと大きかったのではないかとも思った。全景を見渡したこの感激はまた一入であった。

離島の水をたづねて

新井 正

私が離島の水の調査に関係しはじめたのは1972年であったが、その後わずかの間に、日本の南から北まで、いくつかの離島を調査する機会にめぐまれた。離島は一般に面積がせまく、大きな河川もなく、水の悩みが共通の問題である。

私が最初に見た離島の水は、三宅島の湖沼である。三宅島は年降水量が3000mmを越える地域であるが、全島を透水性の大きいスコリアが覆うため、水は極端に不足している。三宅島で最も興味深い